

「坊っちゃん」と「ふさぎの虫」

——「文学上方言の使用の価値」について——

石 井 和 夫

一

「吾輩は猫である」の予想外の反響を見た高浜虚子は、さらに「ホトトギス」の部数を伸ばすために、漱石に次の小説を依頼した。こうして執筆された「坊っちゃん」の中に方言を使用する際、漱石は松山出身の虚子に「四国辺」の訛りの校閲を頼んでいる。折しも二葉亭がゴーストの小説の翻訳「ふさぎの虫」^(注1)を「新小説」に連載して、完結したばかりだった。二葉亭はロシアの「田舎言葉」^(注2)を翻訳する際、時評で「葛飾訛り」^(注3)と評された言葉を当てたのだが、その「文学上方言の使用」^(注4)の是非をめぐって、論争が

起こっていた。こういう同時代の文壇の動向をたどっていると、漱石が「坊っちゃん」に方言を採用したことの意味が色合いを変えて浮上する。

改めて「吾輩は猫である」と「坊っちゃん」を比べると、前者はほぼ東京語で統一され、時に俗語を交えた会話が挿入されて、その会話主の人物像を戯画化する効果を発揮する場面がなくはないが、後者^(注5)においては東京語と四国訛りの対立が、そのまま小説の二項対立の構造に重なっているという意味で、方言が作品に占める比重が大きい。「坊っちゃん」の精彩に富んだ作柄は、相異なる二つの言葉の摩擦にあるといって過言でない。

「ふさぎの虫」が「新小説」に連載された時期は、漱石

が「坊つちやん」を執筆する直前であり、二葉亭がロシアの田舎言葉を翻訳する際、導入した方言について、たとえは、「帝国文学」の「批評」欄に次のような評が見える。

(傍線引用者。以下同じ)

四迷がゴリキーの“Im Weltschmerz”を訳した『ふさぎの虫』が一等だ。然しWeltschmerzを『ふさぎの虫』とした題の訳し方が既に真面目で無い、全体の調子も何となく軽浮に見えるのは残念だ、四迷一流の田舎言葉も稍鼻について来た。此作家がツルゲーネフの『アーシキ』を訳して『片恋』と題して出版した当時の「文学界」に、原作のエレガンスを伝えて居らぬと云ふやうな評があつたと記憶するが、四迷の訳に若し欠点があつたとすれば、『片恋』当時から今日に至る迄、此点が欠けて居つたのだ。だから此作家の筆はポタペンコの『四人共産圏』杯と云ふ可笑味なものに於て最も成功して居る。然しツルゲーネフの『ルヂン』を訳した『うき草』などは例外で、ルヂンが半生の物語などは訳で読んでも涙が零れる。何の彼のと云ふものの、言文一致体の翻訳で現今此人に及ぶものはあるまい。こなひだはゴリキーの“Kain und Artem”を訳した『猶太人の浮世』と云ふのを讀ませて呉れた、今また『ふさぎの虫』を与へて呉れたのは嬉しい

「帝国文学」はいうまでもなく東大の文学部の機関誌で、漱石自身この年の一月、「趣味の遺伝」を発表している。しかも東大の英文学の講師だったのだから、彼がこの記事を読んでいた可能性はきわめて高い。

引用文中に見える「ゴリキー」は、「坊つちやん」の「おれ」が、「赤シャツ」に誘われて沖釣りをする場合で、「帝国文学」の話題とともに浮上してくる記号である。それは次のくだりだ。

一番槍は御手柄だがゴルキぢや、と野だが又生意氣を云ふと、ゴルキと云ふと露西亞の文学者見た様な名前だねと赤シャツが洒落た。さうですね、丸で露西亞の文学者ですねと野だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亞の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だらう。一体赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まへても片仮名の唐人の名を並べたがる。人には夫々専門があつたものだ。おれの様な数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか。少しは遠慮するがい。云ふならフランクリンの自伝とかプッシング、ツー、ゼ、フロントとか、おれでも知つてる名を使ふがい。赤シャツは時々

帝国文学とか云ふ真赤な雑誌を学校へ持つて来て難有さうに読んでゐる。山嵐に聞いて見たら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんださうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。(五)

この後、「赤シャツ」と「野だいこ」の二人は「ゴルキ」ばかり釣り上げて、「今日は露西亞文学の大当りだと赤シャツが野だに話し」、「あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方ありません。当り前ですな」と野だが答へてゐる」のを、「船頭に聞くと此小魚は骨が多くつて、まづくつて、とても食へないんださうだ。只肥料には出来るさうだ。」という第三者の常識を引いて、「おれ」が二人を揶揄する言葉——「赤シャツと野だは一生懸命肥料を釣つて居るんだ。気の毒の至りだ。」——を配している。この一連の文脈が落語の話型の応用であることはいふまでもないが、ここに「露西亞文学者」の「ゴルキ」と「帝国文学」が出てくるのは、小説の構成法でいえば、連想に基づく。その連想の源に、「帝国文学」の「批評」欄の一文が潜伏していたと思われる。

二

「坊っちゃん」と「ふさぎの虫」

「ふさぎの虫」は「新小説」の明治三十九年一月号と三月号に、二回にわたって掲載された。一方、「坊っちゃん」が「ホトトギス」に一括掲載されるのは、「ふさぎの虫」が完結した一ヵ月後、すなわち、同年の四月号である。「坊っちゃん」の執筆時期については次の書簡から推定することができる。

只今ホト、ギスの分を三十枚余認めた所。何だか長くなりさうで弱はり候。夫に腹案も思ふ様に調はず閉口の体に候。(明治39・3・17 瀧田哲太郎宛)

拜啓新作小説存外長いものになり、事件が段々発展只今百〇九枚の所です。もう山を二つ三つかけば千秋楽になります。(同3・23 虚子宛)

「新小説」は一日発行だから、「坊っちゃん」が執筆される前に、すでに「ふさぎの虫」の連載が完了していたと見ていいだろう。一方、「帝国文学」の「批評」欄に掲載された「ふさぎの虫」評は、雑誌の発行が同年二月号だから、この翻訳の第一回に対するものに違いない。

「ふさぎの虫」評を掲載した雑誌は「帝国文学」だけではない。その頃、漱石がどのような雑誌を読んでいたか、

次の一連の書簡によって大方窺うことができよう。

- 1、本年より早稲田文学芸苑其他にて文壇も大分賑やかになり候。(明治39・1・4 小島武雄宛)
- 2、本年から早稲田文学が出ます。上田君の芸苑といふ雑誌も出ます文壇頗る好景気です。(同1・6 加計正文宛)
- 3、二三日前鏡花の海異記とか云ふものをよんで驚ろいた。(同1・10 森田米松宛)
- 4、今日帰宅の上芸苑を拝見した。僕の文の批評は結構であります。あれは頗る比例といふ点から云つては丸駄目の作であります。(同2・13 森田米松宛)
- 5、早稲田文学の三号の小説評(先刻は失礼アレカラスグ読ンダ)(同3・3 野村伝四宛)
- 6、今月は新声でも新潮でも手廻しがいい、みんな三月中に送つて来た。(同4・1 虚子宛)

「帝国文学」の他、ここには「早稲田文学」「芸苑」「新声」「新潮」があげられている。なお漱石書簡の「3」にある、鏡花の「海異記」は「新小説」の明治三十九年新年号に掲載されているから、「新小説」もこれに加わる。そして先の「早稲田文学」の「彙報」小説界」に紹介された「ふさぎの虫」評を掲載しているのは、このうち「芸苑」の二号である。

「芸苑」は漱石の同僚、上田敏が「鏡影録」と題して月評の筆を揮い、漱石の弟子、森田草平も度々寄稿した。漱石の森田宛の書簡に、「芸苑」毎度御贈にあづかり奉謝候(明治39・4・1)とあり、この雑誌を毎月寄贈されていたことが確かめられる。先に引用した漱石書簡の「4」は二月十三日午後五―六時の消印のあるものだが、同じ日に午前八―九時の消印のある書簡を森田に送っている。^(注7)その書簡の結びに、「僕の文章の評をしてくれたさうで寔に難有い。夫は^{それ}拝見の上にてまた何とか申し上げやう」とあるから、漱石は、森田の作品評が「芸苑」の二号に載ったことを知らされて、帰宅後、早速この雑誌を読んだ。問題の批評文は「新年の小説」欄の「趣味の遺伝」評で、筆名は「羚羊子」とある。これは当時森田が愛用したペンネーム^(注8)だった。この評の中に次のような個所がある。

先づ題の『趣味の遺伝』である。あれは趣味と云ふものか知ら、尤も冬枯の墓場へ豆菊の花を美人が供へると云ふやうなことも有るから、或は趣味に相違ないかも知ぬが、若し趣味だとすれば羨ましい趣味である。又『趣味の遺伝』と云ふ題が一寸聞いただけでは小説だとは思はれないが、『これも西片町に住むで、図書館以外の空気をあまり吸つたことの無い学者が』附けたとすれば適当かも知れない。(中略)『対照』の講釈は数へて見ると六頁半、行数にして百〇三行、字数にしては嫌に成る程有つた。それには又話の筋と格別関係の無い挿話が多い。(中略)正月の『ホト、ギス』に『吾輩は猫である』が又出たのを見て、自分の友人が『世間ぢやもう徐ろく猫にも飽きて来て、好い加減に止めたら好い位に思つてゐることは、この作者のことだから気が附かない筈は無い。気が附いて居て其処を故意と書くんだから、随分旋毛の曲つた人なんだね。』と云つたことが有るが、(中略)作者はそんなことも考へて居るんぢや無い、たゞ恰度泉の水がひとりでブクブク湧上るやうに、思想の湧くに任せて、花が咲かうが鳥が鳴かうが、ひとりで書いて居るのらしい。

森田の評は辛辣だが、漱石はこれを「結構」と鷹揚に受

「坊っちゃん」と「ふさぎの虫」

けとめている。先に引いた漱石書簡「4」の「あれは頗る比例といふ点から云つては丸駄目の作である。」という個所、また、これにつづく「趣味の遺伝といふ趣味は男女相愛するといふ趣味の意味です。猫は世の中があきた抔といふ事はない。二三の気短な連中がそんな事を云ひたがるのだ。猫の読者はそんなに急にあきやしない。僕のつむじは真直ぐなものさ。猫をかくのは立派な考だと思つてゐる。決してブク／＼湧いて出ては来ない。只無暗にかいてるとあんなものが出来るのです。」という文脈と、ここに引用した文中の傍線部との対応によって、この書簡が森田の「趣味の遺伝」評に対する返事であることが確定できる。

そして、この森田の「新年の小説」欄の批評は、さらに伊藤左千夫の「野菊の墓」、鏡花の「海異記」のほか、二葉亭の「ふさぎの虫」の翻訳について論じている。その「ふさぎの虫」評は次のような内容である。

会話が葛飾訛りの甚いのへ持つて来て、地の文までそれにかぶれて居るから読みにくいこと夥しい。斯うなると文学上方言の使用の価値が問ひたくなる。仮令ゴルキイの原文が土語を使つて、読者をして曠野の香を紙上に嗅がしめんとして居るので有つても、之れを葛飾訛に翻訳しては、露西亞の曠野を想像する訳には行かない。又

人物の性格が方言を使用すると否とに依て消長するのでは無からう。自分はこの葛飾訛が所謂小説の上での訛ではなく、殆ど写実に近いことを認むると共に、若しこれが只作者の好事に出でしものとすれば、読者の迷惑も甚しいと申したいのである。その外賞めることは老大家のことだから略して置きます。

漱石は自らの「趣味の遺伝」評とともに、この「ふさぎの虫」評を読んだのである。

「坊つちやん」執筆後のことになるが、「早稲田文学」の「彙報」小説界の評者は、この批評を引用して、「葛飾訛りの過度なるを難じ、兼て「文学上方言の使用の価値」に就いて疑ひを挿んで居る。」と紹介した後、「是れ即ち自然派の作物に取りて一個の重大なる疑案であらう。」と指摘した。この評は直接的には引用文中の「葛飾訛が所謂小説の上での訛りではなく、殆ど写実に近いことを認むる」という個所への反応と思われる。自然主義は現実生活を再現するため、卑俗な題材を選ぶ傾向があり、その一環として、都会を知らぬ田舎の人間を描写する時、彼の言葉がその土地に根ざした方言となることは避け難い。そこで「文学上方言の使用」の是非が自然主義の作品の評価に結びつくのである。

こうして「ふさぎの虫」の反響にあらわれた小説の中の方言論議は、明治文壇に流行の兆しが見えていた自然主義の評価と接点をもつことになっていく。藤村が硯友社や一葉の文体に象徴される「雅」を脱して、平俗な文体に腐心した『破戒』が自費出版されたのは、奇しくも二葉亭の「ふさぎの虫」が連載を終えた同時期、明治三十九年三月である。

ところで、先の森田の「新年の小説」を掲載した「芸苑」の二号には、上田敏の月評「鏡影録」が同時掲載されていて、その中に「ふさぎの虫」に言及した次のような個所がある。

『帝国文学』は二葉亭氏がゴオリキイの小説『世界苦を』ふさぎの虫』と訳したるを見て題名既に真面目ならざるを咎め、全体の調子の何となく軽浮なるが如く見ゆと憾みたり。未読なれば、全体評の当れるや否やを断言し難けれど、西洋近古の文或は優雅の文に於ける二葉亭氏の伎倆の如何を窺知る能はずと評したるはかゝる多少の疑ありければなり。莊重の文幽婉の趣を写さむとは、氏の文体は適当ならず。世の翻訳を評する人よく這般の消息に通じて後、せざれば唯自己の好む所に偏して、公平の趣味に到達すること難からむ。

引用傍線部は、上田敏がかねて二葉亭の翻訳に批判的であったことをものがたる。肝心の「ふさぎの虫」については、「味読」のまま批評を加えた無理が露呈している。ロシアの田舎言葉に、日本の方言を当てたことが論議の的になっているにもかかわらず、「莊重の文幽婉の趣を写」する場合、二葉亭の「文体は適當」でない、などと評するのは見当はずれだ。漱石はこのような同僚の敏の月評をどういう気持ちで読んでいたのだろうか。

なお、二葉亭がこれより先にも翻訳に方言を常用していたことは、先の「帝国文学」の「四迷氏一流の田舎言葉も稍鼻について来た。」という言い回しに明らかだが、「ふさぎの虫」が攻撃された後もこの傾向は変っていない。^(注10) こうした二葉亭の野性味のある文体と、「ふさぎの虫」と同時期に出版された『破戒』の平俗な文体を重ねた上で、上田敏が月評の中で、むしろ彼自身の趣味を窺わせる「莊重の文幽婉の趣」に言及した個所とを照らし合わせるならば、明治文壇における「雅」と「俗」の対立の構図が浮上する。なお、「ふさぎの虫」の方言批判は「電波新聞」^(注11)の「新刊批評」欄にも、「露西亞の暗黒面は情景共に活躍すれど惜い哉對話のべい／＼語は耳障りになる事非常なり」とあり、「早稲田文学」の「彙報」小説界」の評者は、これを

「坊っちゃん」と「ふさぎの虫」

紹介して、「葛飾訛りの是非に就いては、割合に多数の意見が一致したと見え」と記している。もっとも「帝国文学」「芸苑」「電波新聞」の評者と反対に、これを肯定する意見がなかったわけではない。次の「読売新聞」日曜付録^(注12)の「片々録」はその一例である。

二葉亭氏の「ふさぎの虫」ハ葛飾訛がうるさいとの批評が同誌（「芸苑」二号 引用者注）中にあつたが吾人ハこれを再読三読して、ます／＼其の妙味を覚えた。嘗てゴルキーの短篇小説を間延びの文章で訳されたのを見て、読み終る勇氣の起らなかつたことを想起して、定名ある大家に阿るのでハないが、實際四迷氏の翻訳の伎倆に感服した。

筆者は正宗白鳥である。白鳥のこの批評は先に掲げた上田敏の月評と対照的だ。そしてそこに二人の文学観の対立が反映されていて、そのまま白鳥の漱石・敏批判に直結しているのだが、この問題は後述する。ただし、この「ふさぎの虫」の方言を擁護した白鳥の批評は例外であって、「早稲田文学」の書評子が概括するように、二葉亭が「ふさぎの虫」に採用した方言に「非」を唱えるのが、当時の文壇の大方の傾向であったと見て、間違いない。

如上の論争の経緯をたどると、「坊っちゃん」は、「文学上方言の使用の価値」に否定的な文壇の反応を尻目に、あえてその方言を駆使した野心作の意味合いが強くなる。

三

「ふさぎの虫」は粉挽きを業とする男が、ある日、葬列に出遭って、埋葬の祈禱を聞くうちに、現世の空しさに目覚める小品である。これを翻訳した二葉亭の文体がどのようなものであったか、冒頭の個所を掲げてその一端を示せば、次のごとくだ。

夜祈禱を済してから、粉屋のチホンはやつとこなと上衣を脱いで下衣一枚になり、背中ぢゆうをぼり／＼搔きつ、寝台の側へ来た。で、口の中でなむみだぶ／＼といふのが、頓て大きな欠びになつたところへ、透さず十字を切掛けて、颯と形附更紗の帷を引くと、其処に古女房の大柄なやつが塩梅よく夜着に包まつて臥てゐる。眠くさつて死人のやうになつた肥胖のその寝姿を熟々眺めて、宛で吹簫の向面だア、これ、と呟くやうに言つて、彼方向いて、卓の上の燈をフツと吹消し、藁小屋さ往ぎて眠べえちふに、どんねえしても往ぎをらねえ。忌々し

い老婆だ。さア、些とンべえ其方へ寄れと又口小言いつて、拳を固めて、グイと女房の脾腹を一突き突いて、さて夜着をも掛けず、其儘側へごろりと横になり、又一度手荒く肘を食はす。(一)

「芸苑」二号の記者が「会話が葛飾訛りの甚いものへ持つて来て、地の文までそれにかぶれて居る」というように、一行目の傍線部の「やつとこな」、六〇七行の「眠くさつて」は地の文、以下の傍線部はモノログであり、この間に区別がない。会話(モノログを含む)と地の文が混交するのは「浮雲」以来、二葉亭の文体の特徴である。会話の文体は、「お前さん知んねえだかね?」「何だ、青二才の癖に年寄イ馬鹿にしくさつて、手前らに聞かねえとつて、些とも困るンぢやねえぞ、この自然生野郎め!」「でがンすかな」(二)等々、全篇にわたって、こういう言葉が一貫している。しかし、一方でこの野趣に富んだ会話と対照的な、次のような風景描写が織込まれている。

水車を水の滴る音は徐かに銀鈴を鳴す如く伝へ来て、土手向の森に鳴く青莊の声は、唸るかと思はれて物凄く、之が次第に消行いた後は、此声に脅かされた如くに木の葉が一段とさわ立ち、何処やらにブーンと心細い蚊の声

が聞える。(一)

これはツルゲーネフの風景を写した「あひびき」「めぐりあひ」以来、二葉亭の翻訳の徴を示す、平明な言葉による美文である。加えて、冒頭から結末までロシアの俗謡が基調音として貫いているが、途切れ／＼に表現される、それを一繋がりにして記せば、次のようになる。

かき曇る 空に悲しき風の音 物思ふ身に音づれて
難面^{つれなく}も誘ふ袖しぐれ いつそ曠野へ世を^{にげみず}逃水の にげて
跡なく 跡なく逃げて 草に隠さん憂き思ひ 父母もあ
らで甲斐なき身一つを 草よ隠まへ曠野の果に 独り海
辺につくぐと 命つれなき身は捨小舟の 浪にまかせ
て居る時は いつか心もしはたれ衣の 乾く間もなき我
泪(九)

新内風の節回しを取り入れた一種の美文というべきだろう。つまり二葉亭は「葛飾訛り」と評された野趣溢れる会話と、この俗謡風の美文の対照を作品の構造とした上で、二種の言葉の併用によって、民衆の生態を写し出している。「ふさぎの虫」の主題は、平凡な人間がある事件を契機に覚醒するという、東西の文学に普遍化された性質のもの

「坊っちゃん」と「ふさぎの虫」

で、たとえば作風が全く異なる鷗外の「雁」や、葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」にも、これと同一の主題が認められる。したがって、この主題そのものは注目に値しない。問題の核心はほかならぬ二葉亭がこれに目を留めた点にある。

「ふさぎの虫」を発表した翌年、彼の談話筆記「ゴーリキイとアンドレーエフの近業」が「趣味」^(注13)に掲載された。その中でアンドレーエフの「人の一生」に言及して、次のプロローグの一節を紹介している。

「人の一生は始も暗く終も暗い。今までは存在しなかった、無始無終の中に秘められてゐた、何人も思ふことも感ずることも知ることも出来なかつた彼が不可思議にも無の関門を破ると、呱呱の声を揚げて、其短き一生の始を報ずる。何人の手とも知れざる手が、無の暗中の燈火を点ずる、その燦然と光を放つ所、そこに人の生命が有る、燈火の光こそ人の生命である。

生れ来つて彼は人の形を形として、人といふ名を冒し、既に地上に生存する所の他の人に似た者となる。惨憺たる人の運命が、やがて彼の運命となり惨憺たる彼の運命が、やがて人の運命となる、(中略)かくて茫々として知る所なく、始終前途を気にしつ、希望に花やぎ恐怖に

萎れて、詰りは運命の定めた圈内の事を仕尽して、而して其一生を終るのである。」

○随分捻つてゐるが、詰り一種の宿命説だ。(後略)

この「宿命説」を紹介する文章は「ふさぎの虫」の粉挽屋の人生観を翻訳した筆致とよく似ている。当時の二葉亭の関心を窺うに足るものだろう。「人の一生」は後に森鷗外が翻訳した作品でもあり、「妄想」の翁の感慨もこの「宿命説」と一致する。^(注14) どうもこの一文が鷗外を刺激して、これを翻訳させたふしがある。したがって、アンドレーエフの「人の一生」の翻訳に焦点を絞れば、二葉亭と鷗外の宿命観をめぐる興味深い問題が見えてくるはずだが、それは本稿の目指すところではない。

「ふさぎの虫」と漱石の問題に論点を戻せば、「ふさぎの虫」は、文学における方言論争の発端になったことを除いて、「坊つちゃん」との接点を見出し難い。だからこそ、この問題が看過されてきたのだが、正宗白鳥は「文科大学学生々活」の「漱石と柳村」^(注15)の中で、「明星」に掲載された柳村(上田敏)の翻訳詩「燕の歌」「出征」と、漱石が「ホトトギス」^(注16)に発表した俳体詩「童謡」を比較し、次の一節を引用して対照を試みた。

高山の鳥栖巢だちし兄鷹のごと、
身こそたゆまぬ憂愁に思は倦じ、
モゲル過ぎバロスの港船出して、
雄詰ぶ夢ぞ遅しきあはれ丈夫

(出征の一節、ホセ、コリヤ、ド、エレディヤ)

源兵衛が 練馬村から 大根を

馬の背につけ 御歳暮に 持て来てくれた。

源兵衛が 手拭でもて 股引の

埃をはたき 台どこに 腰をおろしてる。

(童謡の二節)

「共に文科大学にてシエークスピアを講ぜる人にして、作風にかゝる大なる差あり」。柳村は「鄙びたる言葉、今様の詞句は厭ひ玉ひ、古語をく」と詮索し、決して「持つて来てくれた。」とか、「腰をおろしてる。」などの語を用うることはない。「夏目先生は全くこれに反し、平凡の事実を平凡に飾り気なく写すを喜び、「鳥栖巢だちし兄鷹のごと」などの廻りくどい語は大嫌ひにて、其のホト、ギス誌上の文章を見れば、さながら無学者の筆に成りし如く、時に冷々淡々白湯を呑むが如きことあるも、決して理屈や、ぎやうぐしい引例はない」。

白鳥が紹介した漱石の「童謡」の四節には、「さうでが

す 相変らずで こん年も 寒いと言った」というような
方言が見える。「ふさぎの虫」の「葛飾訛り」に対して、
こちらは「練馬訛り」である。白鳥は柳村と対照的に、こ
ういう俗語を平気で使う漱石に好感をもった。だから、二
葉亭の「ふさぎの虫」の「葛飾訛り」を擁護した筆致とど
こか似ている。二葉亭と漱石の「俗」を軽んじない趣味は、
白鳥が二人を評価する基準になっている。そして「雅」を
重んじる上田敏は二人と正反対の感受性をもつ。そこに彼
が白鳥の批判の標的にされた理由がある。

白鳥と上田敏の論争の発端は、敏が「芸苑」二号に書い
た月評の次のくだりである。

因に云ふ、坪内氏は『中央公論』に於て翻訳者として
の長谷川二葉亭氏及び内田魯庵氏を推奨せられたり。余
は少年の時代、二氏の文を『都の花』『女学雑誌』等に
見て、大に感興を起したるを記憶す。而して坪内氏は二
氏が流石に西洋の書をよく味つて執筆するが為、文体の
調和宜きを得たりと賞揚し、日本にて云はば元禄時代の
作なるべく西洋の文を古文調に訳す可からず、優雅の文
を漢文調にて物す可からずと云へり。余は長谷川氏内田
氏が、西洋近古の文或は優雅の文を訳したるを知らず、
従て未だかゝる文体に於ける二氏の技倆を窺知ること難

「坊っちゃん」と「ふさぎの虫」

し。

これを白鳥は前掲「読売新聞」日曜付録の「片々録」で
取り上げて、次のように批評した。

二葉亭魯庵の翻訳を坪内博士が称讃したとて、少し嫌
味をいつた。論者自身は嫌味をいつたのぢやない、単に
紹介したのだといふかも知れぬが、「余は少年の時代に
かの二氏の文を見て大に感興を起した。」といひ、今
は不服だとの意を洩らし、「予は二氏が西洋近古の文或
は優雅の文を訳したるを知らず。」云々とて、言外に非
難の意を含めた。不服なら堂々と其の故を公言したらよ
からふと思ふ。(中略)

柳村氏の学殖深きは、世上有名な噂であり、この評論
を見ても察せられるが、吾人は何時も香ひを嗅がされる
計りなのを遺憾に思ふ。泣菫の詩は西洋の誰々に似てゐ
ると数へたてたり、ダンテの語を一寸挿んだりされる計
りでは、甚だ物足らぬ。

上田敏は白鳥の批評に依えて、以下のように論じている。

余が少年の時代に二葉亭魯庵二氏の文を読んで、大に感

興を起したりといひたるを捉へて、今は不感服なりとの意を洩したるものと推測したるは例の廻り気ならむ。余は今も尚二氏の制作を以て一特色あるものとす。『優雅の文』とは坪内氏の談話なる文字其儘写したるのみにして、必ずしも非難にあらず、唯事実を挙げ、注意を喚起したる迄なり。何も『堂々と公言』する程の事にもあらざるべし。

世には何でも無き事に『堂々』とか『血あり、涙あり』とかいふ大袈裟の文字を用ゐる人あり。(中略)

正宗氏はまた余が読書趣味の広きを賞し、尤も読書の感化を未だ余の文章に認むる能はずといふ。余は『大英百科字典』に非らず、又コウルリッジの所謂海綿の如き読者たるを願はざれば、さうさう色々の書籍を読み、直さま之を吹聴はせざる可し。尤も常人だけには少々頭はれて居るかも知れず。

文中の傍線部は、以前から白鳥が敏を批判していたことを知っている表現である。^(注17)しかし、これは相手の言葉尻を捉えた論調ばかりが目立って、上質の論争とはいえない。

「読売新聞」と「芸苑」の間で、白鳥と敏が展開した論戦は漱石の目に入っていたに違いない。なぜなら、この論争が漱石にとって他人事でなく、前掲の上田敏の月評の中で、

彼自身も批評の対象にされていたからである。

同誌(「中央公論」明治39・1 引用者注)上、『予の愛読書』と題するうち、夏目漱石氏はスチヴンソンとメレディスとを挙げたり。流石近代英語の書に通ずる氏の事とて、趣味ある英人の言と一致する所面白し。氏が是迄の文章には、未だ上記二文豪の感化を認むること能はざれど、今後漸次頭はる、事なる可し。

先の白鳥が上田敏を評した引用傍線部は、ここに傍線を引いた個所の論調とそっくりだ。恐らく白鳥は上田敏を揶揄すべく、漱石を評した敏の言い回しを用いたのだろう。そういうお前はどうかんだ。他人のことが言えるのか、という意味を含ませて。漱石が森田に寄贈された「芸苑」二号を読んだことはすでに述べた。したがって同じ雑誌に掲載された同僚の敏の、自分に向けた批評も当然目に入っただろう。敏は同じ月評の中で、内田魯庵が翻訳したトルストイの「イワンの馬鹿」について、次のように論じていた。

後世に愛読せらる可きもの、反て、彼の長篇よりも斯の如き純露西亞風の小説なるやも計られじ。

これをあえて引いたのは、魯庵から同書を寄贈された漱石が、敏の感想と対照的な返書を魯庵宛てに送っているからだ。

拝啓イワンの馬鹿御寄贈を蒙り深謝早速読了致候小生浅学にてイワンの原書をよまざりし為め却て一段の興味を覚候。どうかしてイワンの様な大馬鹿に逢つて見たいと存候。

出来るならば一日でもなつて見たいと存候。近頃少々感ずる事有之イワンが大変頼母しく相成候。イワンの教訓は西洋的にあらず寧ろ東洋的と存候。(明治39・1・

6)

敏は「純露西亞風」と読み、漱石は「東洋的」と捉えた。漱石の書簡の日付は敏の月評より前である。したがって二人の反応が対照的なのは偶然だが、問題は漱石が魯庵訳「イワンの馬鹿」の「教訓」を「坊っちゃん」の「ばか正直」の主題に結びつけていく点にある。白鳥と柳村の論戦に見えた、素養を実作に生かし得るか否かの問題が、漱石の場合、「イワンの馬鹿」読後の感慨から「坊っちゃん」の創作活動へ向かうことよって、具体化される。しかも、翌年、朝日新聞の記者に転身した漱石が、その手始めに執

「坊っちゃん」と「ふさぎの虫」

筆したのは「虞美人草」である。上田敏は、ステイーヴンソンとメレディスが愛読書だという漱石を、今の所その感化は見えないが、やがてその跡が見えてくるだろうと揶揄的に評した。しかし漱石は実際、敏の言ったとおり、「虞美人草」によって、メレディスを倣はせる文体を創造した。この文体への腐心は結果として、自分の文章を批評した敏の月評に対して、一矢報いた意味をもつ。

「虞美人草」の文体は美文だが、『漾虚集』にもその傾向があった。一方、俳体詩の「童謡」や、「坊っちゃん」ばかりでなく、この後執筆した「二百十日」にも、茶店の娘の言葉に「肥後訛り」が見られる。^(注18) 白鳥が早くから注目した「童謡」は別にして、「坊っちゃん」の中の方言が、当時の「文学上方言の使用の価値」をめぐる文壇の論争を背景に(あるいはそれを尻目に)あらわれた一事はもう少し留意されてしるべきだろう。そして「坊っちゃん」の直前に発表されて、漱石の強い反応を誘発した、伊藤左千夫の「野菊の墓」は「矢切村」が小説の舞台である。^(注19) この小説を、「ふさぎの虫」の「葛飾訛り」と、「坊っちゃん」の「四国辺」の方言・「二百十日」の「肥後訛り」の間に置いてみるならば、ローカルカラーが一世を風靡した当代文壇の風景が見えてくる。この後、漱石が「草枕」を執筆した時、その標的の一つに、「金色夜叉」と「不如帰」を愛読

する広範な読者層が定められていた。「正直」の徳を主張する「坊つちやん」にも、その気味がある。これに「文学上方言の使用の価値」論争において、二葉亭の「ふさぎの虫」の方言を「非」とする批評が大勢を占める中で、少数派に立ったことを加えるならば、この作品は同時代を撃つ作家の衝動をアクチュアルに伝えている。

「三四郎」を執筆する前、漱石が当初考えていた標題の一つは「東西」であり、それは作中の東京と福岡、あるいは熊本の記事と符合する。後年の「こゝろ」には、都会と田舎の対比が、人間の相違をめぐる会話の遣り取りを通して描かれる。^(注21) 漱石の作品史において、「坊つちやん」の四国訛りの採用は、黙過しがたい問題を含むといつてよいだろう。

注

(注1) 原作はゴースキーの“Tocka”

(注2) 後出の「帝国文学」第二巻第二号(明治39・2)所載「批評欄」の評者の言葉。

(注3) 後出の「芸苑」二号(明治39・2)所載の記者の言葉。

(注4) (注3)に同じ。

(注5) 多々良三平の「よか天気でござります」以下の「唐

津訛り」(五)、銭湯の客の「あの男も腹のよくねへ男だからね。——どういふもんか人に好かれねへ、」等々の会話(七)、落雲館中学の生徒の「降参しねへか」「しねへしねへ」「出てこねへ」「落ちねへかな」「落ちねへはずはねへ」などの言葉(八)。

(注6) (注2)に同じ。

(注7) 『漱石全集』第二十二巻(平成6・3 岩波書店)所収の書簡番号534・535による。

(注8) 「芸苑」四号(明治39・4)所載の『破戒』を読む、「芸苑」八号(明治39・8)所載の『濛虚集』を評した「新刊評」などに、羚羊子のペンネームを用いている。

(注9) 「早稲田文学」第四号(明治39・4)。

(注10) ボータベンコ「四人共産圏」(「文芸界」第三巻第三号 明治37・2)、トルストイ『軍事小説つゝを枕』(明治37・7 金港堂)、ガールシン「四日間」(「新小説」第九年七巻 明治37・7)、ツルゲーネフ「行文揃はぬ借着とあつてよろけて縞も わからずや」(「文芸界」第四巻一号 明治38・1)、ゴースキー「猶太人の浮世」(「太陽」第十一巻二号、四号 明治38・2、3)、ゴースキー「むかしの人」(「早稲田文学」明治39・5)、ゴースキー「乞食」(「趣味」第二巻七号 明治40・7)、「棕のミハイロフ」(「世界婦人」第二十四号 明治41・7)などに方言が使用されている。

(注11) 「電波新聞」明治三十九年三月九日付の一面。

(注12) 「読売新聞」明治三十九年二月十八日付の六面。なお、この「片々録」は『モンナ・ワンナ』所感」に付した一文。

(注13) 「趣味」第二巻十号 明治四十年十月号。

(注14) 『人の一生 飛行機』(明治44・1 春陽堂)、「妄想」(「三田文学」第二巻第三号、第四号 明治44・3、4)。

(注15) 「XY」の筆名で「読売新聞」明治三十八年一月二十日から二十三日まで「漱石と柳村」(一)～(四)として、四回連載。

(注16) 「ホトトギス」明治三十八年一月号。

(注17) (注14)の文章のほか、「文科大学学生生活」(六歌仙)、「読売新聞」明治37・12・31)の中で、「喜撰法師は上田博士、我庵は赤門の巽柳原、浄瑠璃の文句でいほうなら、「世辞で丸めて浮気でこねて」瓢箪鯉のぬらりくらり、お師匠様いのお迎ひ坊主やや茶汲女の役者には不足はすまい。小野小町は詮方なくば夏目先生か、あはれなるやうにて強からず、知ったか振りや出しや張りの今様学者気質と異つて、凡て控へ目なるは女性にも似通ふならん。予等友人の持て囃するも道理」と諷刺している。

(注18) 娘の会話に「ねえ」「はい」の意。引用者注)という返事の繰返し、「御宮から二里で御座りますたい」などの肥後訛りが見られる。

(注19) 「野菊の墓」は「ホトトギス」明治三十九年一月号に掲載。のち同年四月五日、俳書堂から刊行された。

「坊っちゃん」と「ふさぎの虫」

その冒頭に、「僕の家といふは、松戸から二里許下つて矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上で矢張矢切村と云つてゐる所」とある。

(注20) 渋川柳次郎(玄耳)宛書簡(明治41・8推定)に、「題名——「青年」「東西」「三四郎」「平々地」右のうち御釈み被下度候。」とある。

(注21) 「先生と私」二十八に次の会話がある。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間といふ程のものもゐないやうです。大抵田舎者ですから」

「田舎者は何故悪くないんですか」

私は此追窮に苦しんだ。然し先生は私に返事を考へさせる余裕さへ与へなかつた。

「田舎者は都会のものより、却つて悪い位なものです。(後略)」

さらに「両親と私」において、先生と父の比較がそのまま都会(東京)と田舎の対照になる小説の構造がクローズアップする。